

【縛り制作】BS・DLキー
を使わないで書く学園
物語

おもちさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※※この作品の制作ルールです。※※

以下のルールは本編部分のみに適用し、欄外部分はルール外とします。

・ バックスペースやデリート、投稿画面のやり直しなど、作品の修正が可能な行動の一切禁止。

- ・ 下書きや前準備なども禁止。あらかじめ大まかなストーリーのみの準備とします。
- ・ コピペや予測変換等も禁止です。全てベタ打ちで書きます。
- ・ 時間をかけずにさっくり制作、エンターキーが友達さ！

この4点を鉄の掟として、書けるところまで頑張ります。

もちろん投稿後は一切校閲校正しません、一発勝負です。

ちなみに本編内容は、まともにも書いたとしても面白いものではないので要注意。
※この物語はフィクションです。

目次

第1話	私の日常	1
第3話	激突！ 風紀委員！	5
第4話	謎の転校生	11
最終話	コンガリな生活	16

第1話 私の日常

※※この作品の制作ルールです。 ※※

以下のルールは本編部分のみに適用し、欄外部分はルール外とします。

・ バックスペースやデリート、投稿画面のやり直しなど、作品の修正が可能な行動の一切禁止。

・ 下書きや前準備なども禁止。あらかじめ大まかなストーリーのみの準備とします。

・ コピペや予測変換等も禁止です。全てベタ打ちで書きます。

・ 時間をかけずにさっくり制作、エンターキーが友達さ！

この4点を鉄の掟として、書けるところまで頑張ります。

もちろん投稿後は一切校閲校正しません、一発勝負です。

ちなみに本編内容は、まともに書いたとしても面白いものではないので要注意。

※この物語はフィクションです。

————— 比喩表現ではなく、本当に誤字脱字を楽しむ作品になっています。そういった趣旨が肌に合わない人は、本編を読まずにブラウザバックアップしてください。読後不快な思いをされても、筆者は責任を負えません。—————

それでは本編をお楽しみください。

私は黒羽シヨウコ。

私立コンガリナ高校の2回生だ。

春も終わり、梅雨に入る今は、新入生も落ち着きを見せている。

馴染みの相手を見つけたたり、じんぶんの場所を見つけたりと、それぞれの居場所がみ

つかることをだ。

今日も私はいつものように、昼休みは席で食事wおとっている。

昼にはクロワッサン。

ものごころついたらこころ側の習慣だ。

「黒羽さんm、今日もそんなものをお食べになつて。」

そういつて笑いながら近寄ってきたのは、同じクラスの白銀杏しろがねあんだ。

「パンといつてえばやつぱりアンパン！それ以外は認めないわ！」

杏の両目が野獣のけらめきの様にキラリと閃光を放つ。

いつものごあいさつのように、私の机めがけて攻撃してきた。

彼女の必殺わさざ「ギャラクシアン・パトリオット・クレイジースターだ」。

ちよつと嘯んでしまったな。「ギャラクシアン・パトリオット・クレイジースター」だ。

今度はちやんと言えたな。

それを見たまわりの生徒がざわめきだす。

「あ、あれは杏様のギャラクシアン・パトリオット・クライジースターよ！」

「ほんとだ。まさかこんな場所でギャラクシアン・パチロイット・クレイジースターが見れるなんてな！」

標的にならないものたちは気楽なものだ。

私はいつものようにお返しに技をくりだした。

「みて！黒羽様の強襲龍爪猛虎撃よ！」

「え、なんだ？その強襲龍爪猛虎撃ってのは？」

「バカ、お前強襲龍爪猛虎撃をしたらないってのか、すっかり見とけ。白銀さんと黒羽さんの2大派閥が生まれたきっかけの技だぞ！」

周りが随分とやかましいな。

教室で騒ぐなどというのはこういう理由からなのだろうか。

聴衆がいなの中で戦ってこそ意義があるのだが。

互いの技が交差する。

まったこの互角の技に誰もが息を飲むが……。

キーンコーンカーンコーン……。

はい、午後の授業だ席つけ。

教師の合図で勝負は持ち越しとなるであつた。

第3話 激突! 風紀委員!

キーンコーンコーンコーンコーン

こうおん前で私はチャイムを聞いていた。

朝の予鈴だが、校舎内ではなく校門前でそれを聞いた。

週に一度の荷物チェックだ。

生徒指導部の教師と風いき委員が陣取っている。

強引に突破しようとするものはいない、怪我をしたくないのはみんな同じだから。

「お前! なんだその甘ったるい匂いは! さ朝何食べた?!

「え、えつと……ゼリーを少しだけ」

「ばつきやろう! 朝は白米、焼き魚、味噌汁、焼き海苔、付き合わせと決まっているだろぅが!」

「す。すいません! うち共バラキなので母は朝忙しいんです!」

「そうか、じゃあ後でこの書類を書いてこい。毎朝弁当を届けさせる。」

「……わかりました。」

なんと恐ろしい、神をも恐れぬ所業だ。

人の食卓に口を出すなど誰にできようか。

あの名も知らぬ少女は、今後朝食にゼリーを食べる事ができないだろう。

それはアイデンティティを、個性を、生きがいを奪う事に保加ならなかった。

「つぎは、黒羽。お前か……」

「うん、お手柔らかな」

「お前の相手は俺じゃねえ。こいつからだ。」

「黒羽さん、今日こそ引導を渡してさしあげますことよ。」

そういつて私をかくこんだのは、風紀委員の3姉妹だ。

ボブストレート頭が長女、ポニーテイルが次女、ツインテイルが三女のわかりやすい三姉妹だ。

「うふふ、パンなdpどにうつつを抜かすおバカさん。今日こそお米の素晴らしさを叩き込んでさしあげますのよ！」

「食らいなさい、ホワイト・トライ・リゾット！」

三人が絶妙な連携を見せて、私を三報から囲んだ。

姉妹の体からは白い米が噴出し、白い三角形を生み出した。

そして徐々に領域が狭まっていく。

私の身の安全が危ぶまれる。

非常用クロワツサンを出そうとしたそのとき、みになれない音が響き渡った。

カラン

コロン

下駄の音?

いったい誰が?

音の発信源をみると、ボロボロの学ランを着た男だ。

おちらに向かって歩いてくる。

知らないうちのものがっこうはブレザーだから、他校の生徒だと思うが。

「その男、生まれ! どこの生徒だ?」

「ん、コンガリナ高校ってここだろ? 転校生だ、聞いてないか?」

「む……確かに男が一人来ることは聞いているが。」

「なああんた、こんなけつたいなこといつつおやつてんのか?」

男はそう煽りギイにいるよ、ゼリーの少女の方をみた。

「あんた、朝はたくさん食えだの言ってたけど、それはどんなときでもか？」

「当たり前だ、成長期はしつかり食わねばならぬm。」

「ほう、それは胃を悪くしたときもか？」

「な……なんだと!？」

「患ったり食あたりをしたときに、そんな膨大な食事は帰って問題がある！ そのことを考慮して言ってるのか！」

「ぐ、ぐあああああ！」

学ランが良くわからん言葉を吐いたかと思うと、生徒指導の教師が苦しみ、壁に吹き飛ばされ、服が全て破けて気絶した。

ん？なんでだ？

「ああ、やつちまった。おれは正論で相手を責めると服を全自動で破いてしまうんだ」

「どういう理屈だ？」

「pれが、オレが聞きたいください。なぜか相手は吹き飛んで、全裸になって気絶する」

「不思議な力もあったもんだな」

そんなふわつとした会話をしていると、周りを風紀委員が囲んだ

「おのれ、よくも先生を!」

「あなたの存在は調和を乱すものです。」

「あなたの罪を数えなさい、わわいと・トライリゾット!」

まただ、また同じように白い光に襲われ始めた。

学ランは一切慌てていない、なぜなのか。

「城ちゃんたち、この白いのはお米かい?」

「もちろんそうよ、今朝たつくくしたばかりのお米よ。美しいでしょう?」

「へえ、もちろん洗ってあるんだよな?」

「当たり前でしょう、お米に対するれいじぎは何よりも最優先しれているもの。」

「そうか、これ無洗米だぞ?」

「き、きやああああああああ!」

三姉妹が綺麗に吹き飛んだ。

それを見た男どもは一斉に群がった。

破廉恥なやつらだ。

しばらくすると、三姉妹の服は……

ボタンが一個ポロリと落ちただけだった。

外野のぶいんぐが激しい。

ストリップ的なものを期待していたのか？

「ボタンが一個取れただけだったな。」

「そうなんだよ、女相手だとそれとか、ファスナーが壊れたりするくらいだ」

「男は全裸になるのか？」

「だな、不思議だが」

不思議というか理不尽だな。

邪魔者の居なくなつた校門は、素通りするだけだ。

私たちは一斉に教室へと向かった。

あの学ランの男。

転校生と言っていたが、いったい何者なのか。

私はなんとお言えない胸騒ぎにおそわれたのだった。

第4話 謎の転校生

転校生がやってきた。

例のガクレランを着た男だ。

教師がツラツラと名前を書き上げていく。

源池マサヨシ、コイツの名前だろう。

「ゲンチ マサヨシというもんだ。これからよろしく頼むぞ：」

パチパチパチ。

おぎなりな拍手。

皆んな校門での出来事を既に知っていた。

なんとなく妙な雰囲気になるのも無理無い話だった。

なぜだろう。

マサヨシを見ていると、不思議な気持ちになる。

懐かしいような、前から知っているような。

こんな知り合いは居ないはずなのに。
ついつい目で追ってしまふ。

教科書がまだないからか、隣のやつに見せてもらたたりしている。
休み時間は風委員に絡まれた。

体育はみんなと違うジャージを着て受けていた。

生徒指導部の教師がまた吹っ飛び、全裸になった。

昼休みはどこかに消えた。

教室でご飯を食べない派らしい。

昼休み中に外から大きな物音がした。

そつちに目を向けると、生徒指導部の教師がやはり全裸になって壁にめり込んでいた。

午後の授業も終えて、部活に入っていないマサヨシは早々に帰る支度を始めた。

見失いそうになりつつも、なんとか背中を捕まえた。

すると、道を塞ぐように風紀委員の3姉妹が現れた。

「お前らしきつこいな、今日はもうこの辺で勘弁してくれよ」

「そうはいきません！ 数々の狼藉を見逃す私たちではありませんわ」

「狼藉だったって、ただ会話をしてアラを指摘しただけなんだが」

「お黙りなさい！ この学園で私たちに、生徒指導部に逆らって生きていけない事を思
い知りなさい！」

そういつて3人は朝と同じフォーメーションになった。

あれは既に破れている、結果は火を見るおり明らかだった。

いや、違う。

米が……油を含んでいる。

香ばしいこの香り、チャーハンか！

「ウフフフ、とうとう私たちを本気にさせましたわね。グレイトフル・チャ・ハーンを食
らいなさい！」

「今度は無洗米じゃあないわよ、さつきと同じ手を通じるとは思わないことね！」

「へえ、やるじゃん。つうことはキレイに洗剤で洗ってくれたのか？」

「もつちろん、舶来品のありきたりのものじゃない、バカ高い洗剤で消毒済みよ」

「米を洗うってそうじゃねえからな」

「キヤアアアアア！」

3人が一斉に吹っ飛んだ。

朝とは比較にならない威力だ、手加減をやめたおだらうか。

「おい、今度こそチャンスだぞ。風紀委員のエロシーンが見れるぞ！」

「ああ、お願いします、どうかパンツだけでも、むしろパンツ見せてください！」
「jど素人が！ 胸元に切れ目が至高にきまつてるだろ！」

なんだろう、風紀委員は敵みもないもんだが、今は道場している。
つうかこいつらぶつ飛ばしていいか？

「ころ……いや、やめておくか」

「物騒なひとりごとだな、黒羽。オレに用があんのか？」

「い、いや。なんでもないが」

「今日一日ずっと見てたろ？ まさか恋なんていわねえよな？」

「ああ、全く。全然好みじゃない」

「ハッキリ言われるとキツイもんだがな」

照れたように顔をかくマサヨシ。

……そうだ、おい。思い出した！

こいつは小さい頃に知った仲だ。

「お前はm、昔に会ってるな？」

「思い出したようだな。施設の外は楽しいか？」

「……さあ」

「お前は運良く抜け出せたよな。オレはしとおあい、ゴホン！ 失敗して逆おどりして二度と外に出して貰えなかったぞ」

「そんなお前が良くここに通えてるな」

「そうだ、交換条件付きで出歩けてる」

「条件？」

胸騒ぎが確信へと変わる。

マサヨシが何かを諦めたような、悲しい笑顔を向けてくる。

「黒羽シヨーク、お前を施設に連れ戻すことが条件だ」

最終話 コンガリな生活

黒羽シヨウコ、お前を連れ戻す。

確かにマサヨシはそう言った。

私を鳥かごに再び閉じ込めるために舞い戻ってきたのか、私のあえに。

「冗談じゃない、あんな場所は二度とごめんだ」

「そうだよな、オレだってそうさ。でもやらなきやオレがまた閉じ込められるんでな」

「じゃあ力づく、だな」

「そうなるな」

そうやすやすとやられる訳にはいかない。

先手必勝、こちらの持つ全力で相手を屠ってやる。

「くらえ！ 強襲龍虎猛爪撃！」

「やるな、だがそのわあぎ名。変な名前してんな。クロワツサン関係あるか？」

「グハツ！！」

な、なんてビビドな攻撃だ。

気を抜くと意識を失いそうになる。

まさかここまで実力に違いがあったなんて。

「シヨウコ、しっかりしなさい。ギャラクシアン・パトリオッチ・クレイジースター！」
「クソツて！ 新手か？」

「杏……？」

「情けないわね、そんな醜態さらして私のライバルを気取る気？」

「私は一度だつてライバルを自称しなかった」

「黙りなさい！ 行くわよ」

「パトリオットつて言いたかった？ そこ良くかむの？」

「グハアア！」

「杏！」

くそ、なんて隙の無さだ。

二人掛かりでも意に解さないだなんて。

じつりよkが、違いすぎる！

「黒羽さん、白銀さん、今は休戦よ」

「そうよ、共闘しましょう」

「しょう」

3女はセリフそんだけか。

それならしやべらなくてもいいんじゃないか？

私たちは5人で円を描くように並び、マサヨシを包囲した。

これで、有利になっただろうか。

「怖いねえ、一人相手に女の子とはいえ5人でくるの？」

「よううねえ、そんな態度で居られるのも今のうちよ。みんな行くわよ！」

「ええー！」

「食らいなさい！ ギャラクシアンホワイト強襲・トライパトリオット龍爪・猛虎リゾツ

トクレイジースター!!」

「な、その技は、うわああああー……」

た、倒したのか？

ピクリとも動かないな。

あ、いまちよつと動いた。

ともかく、撃退成功だ！

「やったわ、マサヨシをぶつ倒しましたあ！」

「強かった、途轍もなくな」

「さあ、邪魔者が片付いたところで、シヨウコ！ 血統よ！ 今日こそどつちが強いハッキリさせましょう」

「待ちなさい、校内での私闘は禁止されているわ」

「さつきまでマサヨシとやりあつてたが？」

「これは指導、あなたたちのは私闘。そうでしょう？」

結局私は日暮れまで殴り合いをするはめになった。

いつになったら落ち着いた、普通の高校生活を送れるのだろうか？

ここは私立コンガリナ高校。

地味かもしれないが、飽きることのない一風変わった高校だ。

中学生のお子さんが居る方は、ぜひここへの進学をお勧めする。

刺激の多い、変化に富んだ毎日が送れることを、わた氏が約束しよう。

―完―